

ヤンゴン素描 No. 27

山形洋一

ジョゴーン 乳牛の臭いただよう工業研究地区

プラスチック廃品が線路わきに干してある駅のそばに、工科大学やFAOなどが点在。抗毒素生産の規格に満たない小型の毒蛇の棲みついているという噂もあるが、...

列車の中でもし背丈を越える大きな袋が持ち込まれるのを見かけたら、その行き先はジョゴーンである可能性が高い。なかみは使用済みのビニール袋などで、かさの割には重くない。ユウェツ・ラ Ywet Hla 通りにある町工場がそれを買取り、近くのドブ水でざっと洗って線路脇に広げて干し、電気スイッチや石鹼箱などに成型するのだという。

ジョゴーン (Gyogon) は中央駅から時計回りに 15 番目、インセイン町に入って最初の駅で



ある。周囲は田園地帯で、プラットフォームには近くの牛舎から牛の匂いが漂ってくる。こののどかな空間がプラスチック再生の下ごしらえに利用されているのだが、いずれ鉄道が電化されれば、電線に絡みついて運転を妨害するビニール袋は、きびしく排除されることだろう。

図：ジョゴーン駅のプラットフォームに残されたプラスチック

古い地図を見るとジョゴーンは蒸気機関車 (SL) 整備場の最寄り駅になっている。客車や貨車の整備場はインセイン駅に隣接しているが、爆発事故の危険をともなう蒸気機関車の整備は、町からすこし離して置かれたのだろう。蒸気機関車が使われなくなった今日、ジョゴーン駅の利用客は少ない。

駅の周辺には科学技術関連の研究施設が点在して、我が国の筑波研究学園都市のようだが、この辺鄙な土地を選んだには、冷戦時代のスパイ防止への配慮があったのだろう。

なかでも有名なのはヤンゴン工科大学 Yangon Technological University (YTU)だ。母体は第一次大戦直後の1924年、ラングーン総合病院構内に創設されたラングーン大学工学部だが、冷戦時代の1961年、ソ連の援助でジョゴーンに移転されて Burma Institute of Technology (BIT) と改称。その後 Rangoon Institute of Technology (RIT)、Yangon Institute of Technology (YIT) と、出世魚ブリのごとく名を変えて、ついに独立の大学 YTU となったのだ。

YTU には工学、建築などの古典的学科に加えて、鉱山、石油、繊維などの実業学科がある。Wikipedia によれば芝浦工大と姉妹関係にあるそうだが、ここで養成された頭脳の多くが、シンガポールや米国へ流出しているという。

近くには漁業学校と水産加工工場や、FAO をはじめ、農牧・林業・水産業関連の研究施設も点在する。アメリカ洗礼派ミッション (ABM) が創設したキリスト教工科学院 Institute of Christian Technology では、カレン族など少数民族を多く受け入れているようだ。

社会時代主義の国策会社「セイワール・ファクトリー」(製薬工場) は安くて品質の高い製品を国民に提供してきたことで知られている。隣接する製薬技術開発研究所には蛇毒の抗毒素血清を作る部門があり、原料として生きた毒蛇が地方から持ち込まれる。だが規格に満たない小型の蛇は突き返されるので、蛇屋は帰り道、この厄介な荷物を隣の媒介虫対策部の敷地にポイと捨ててゆく。だからここは毒蛇の巣窟なのだと、媒介虫対策担当の医務官から聞いたことがある。しかしここに長く勤めてきた JICA 専門家によれば、毒蛇などついぞ見かけたことがないそうだ。どうやらその医務官お得意のジョークらしい。

ところでヤンゴン市の茶店などで出す紅茶には、缶入りの練乳が使われていて、ジョゴーン近辺で搾られた生乳が何処に売られてゆくのか、ちょっと気になる。近くを走るバスに生乳の缶を積み込む人はほとんどインド系で、行き先は市の南の方角なので、おそらく商業地区の一角で大きな平鍋で煮詰められ、インド風の甘い菓子に加工されるのだろう。

インド人の慶事に欠かせない甘菓子は商業区のあちこちで見られるが、牝牛に変身する女神ラクシュミ (吉祥天) を祀る寺の門前にやや大きな店があり、そこで売られる素焼きの容器の中で凝固した生ヨーグルトは、よそより一段と美味いような気がする。

(了)